

このままでよいのか、中央官庁街 — 二人の外国人建築家に思いを馳せて



清水英範
論説委員
東京大学大学院工学系研究科
教授

かつて、江戸城の南、雄藩の壮麗な屋敷が連なる土地に、霞が関坂という比較的急な坂があった。西の永田の丘から東の日比谷に下る坂で、坂上からは江戸湾や富士山を望むことができた。いつしか江戸有数の名所、景勝地となり、歌川広重もこの坂を好んで描いた。

わが国の中央官庁街（立法・司法地区を含む）は、この地域を中心に営々と築かれてきた。いま、その空間的構成と都市景観は一定の水準にあると思う。しかしながら、明治時代、官庁街計画の草創期に大きな足跡を残した二人の外国人建築家に思いを馳せるとき、せつかく恵まれた土地を引き継ぎなら、どうしてなんだ、このままでよいのかと、強い問題意識を抱くのである。

二人の外国人建築家は、ともに井上馨外務卿（後に大臣）に請われ、官庁街計画に参画した。周知の通り、不平等条約の改正を見据え、東京の欧化政策を主導したのが井上であった。井上は、国会議事堂と諸官庁を、日比谷練兵場を中心に集中的に配置させる構想をもち、その試案の作成を彼らに託したのである。

明治 17 年 6 月、工部省にいた英国人建築家コンドル（Josiah Conder）が太政官に招聘された。コンドルは、東京での豊富な経験を踏まえ、また自ら地質調査を行って自信をもって計画を立案した。その計画は、江戸時代の埋立地にして地質粗悪な日比谷練兵場内東側を大公園とし、場内西側と、桜田通りを挟んで霞が関坂の南北に諸官庁を配するものだった。言うまでもない。現在の日比谷公園と霞が関一、二丁目の原型である。コンドルは提案に際し、余裕をもった空間を確保するため、すべての官庁をこの地域に集中させる必要はないこと、特に国会議事堂をこの地に置く必然性はないこと、そして建物の規模と形態を揃えて美観に配慮することを訴えた。

現在の霞が関はどうであろうか。この地区では、戦後一貫して合同庁舎による高層化が進められてきた。その結果、例えば日比谷公園の西側には、官庁街が公園に背を向けるかのように、高層ビルが立ち並ぶことになった。近年では、財政再建策の一環として、大手町などの国有財産を売却し、その機能の受け皿を霞が関に求める形で、さらなる再開発事業が実施、検討されている。そもそも、わが国の諸官庁は、世界的に見ても、霞が関という一地区に極端に高密度に配置されている。危機管理対応という点でも、大いに危惧される。

明治時代に話を戻そう。内閣制度が発足し、東京での条

約改正会議を間近に控えた明治 19 年 2 月、井上は再び官庁街計画に乗り出した。この計画は、ドイツのエンデ・ベックマン建築設計事務所に託され、先陣としてベックマン（Wilhelm Böckmann）が来日した。

ベックマンは、この地域の地形や地質を踏まえ、幾何学的な幹線道路網と空間的に余裕を持たせた建物配置による、壮大なバロック都市計画を起こした。そこに示された国会議事堂の位置は、なんと霞が関坂の坂上、すなわち現在の議事堂が立つ永田町の丘であった。ベックマンは「国会議事堂の如きは…一国の品位にも係わる」とし、標高が高く、聳え立つ議事堂の姿を遠くからも望め、また皇居にも日枝神社にも近く、空間を演出する上でも最適な土地として、自信をもって永田町を選んだのだ。

計画図に示された議事堂の正面も、現在と同じく桜田門方面を向いていた。ベックマンは、20m 以上も高低差のある永田町と市街地をどのように結ぶかに苦心した。その結果、議事堂の正面を日比谷方面から傾け、地形の緩傾斜を利用して桜田門外まで長く、まっすぐに「国会大通り」を引いた。そして、沿道には並木を、桜田門外には広場を配して、ヴィスタを演出した。

現在の国会周辺はどうであろうか。議事堂正面から「国会前」交差点への広幅員道路は戦後、オリンピック前に整備され、近年では、同交差点から議事堂への眺望景観を保全する制度もできた。しかし、正面道路の距離は短く、眺望の視点場は横断歩道上でしかない。そろそろ、次なるステージへの議論を始める時ではないか。また、議事堂から最高裁判所、首相官邸、日枝神社にかけての一角は武蔵野台地の東端で地形の起伏に富み、議事堂への眺望など、景観を演出する上で本来魅力的な空間なのだが、それを活かしていない。大きな課題である。

最近、国立公文書館を国会周辺に移転させる計画が議論されている。有力な候補地は、憲政記念館や日本水準原点のある国会前庭（北庭）だという。移転計画に異論はないが、この北庭は自然地形が活かされ、また皇居や都心のビル群を一望できるなど、国会の土地が丘陵地であることを実感させてくれる貴重な空間である。国会周辺では何処でも言えることだが、特に北庭においては、地形や眺望への徹底した配慮を望みたい。

コンドルとベックマンが重視したのは地形や地質、官庁街の空間的な余裕と整然とした景観、議事堂の象徴性とそれを具現化させる眺望であった。彼らの計画を歴史に埋もれさせてはならない。日比谷公園も国会議事堂も、彼らが示した通りにあるのだから。

参考文献

- (1) 清水英範：コンドルの官庁集中計画に関する研究、土木学会論文集 D2（土木史）68 巻 1 号、2012 年。
- (2) 清水英範：ベックマンの東京計画に関する研究—国会議事堂の位置選定を中心として、土木学会論文集 D3（土木計画学）70 巻 5 号、2014 年。